様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１７日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１４７
研究課題名（和文）　カシュブ語統語論の総合的研究

研究課題名（英文）　A Comprehensive Study of the Kashubian Syntax

研究代表者
野町　素己（NOMACHI MOTOKI）
北海道大学・スラブ研究センター・准教授
研究者番号：50513256

研究成果の概要（和文）：
本研究は、これまで研究されてこなかったカシュブ語統語論を、機能文法理論の枠組みを用いて、特に「受動性」、「結果性」、「存在性」、「所有性」、「具格性」、「共格性」といった文法・意味カテゴリーの単位で分析した。その際、現地調査で得られた例を分析対象とし、言語接触論と言語類型論の研究手法を複合的に用い、特にドイツ語およびポーランド語からの借用構造の抽出とその文法化の度合いおよびプロセスを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In this research project I have conducted a survey on Kashubian syntax in the framework of functional grammar theory with special attention to such semantic-grammatical categories as passivity, resultativity, existentiality, possessivity, instrumentality and comitativeness. From these categories I also succeeded in extracting constructions of German and Polish origins (calques) and analyzed their degree of grammaticalization from both synchronic and diachronic perspectives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：スラヴ語学、類型論、統語論

１．研究開始当初の背景

従来のカシュブ語研究では、ポーランド方言学研究の伝統に従い、音声学・音韻論、形態論および語彙研究が中心を占め、統語論はほぼ手付かずであった。最も大きな研究成果であるStieberやPopowska-Taborska 等による「カシュブ及び隣接方言の言語地図」(1964-1978)においても、音声・音韻的記述に重点が置かれ、統語論は全く言及されていなかった。数少ない統語論を含んだ研究として、Lorentz(1927-37)「ポメラニア語文法」、Breza(1980)らの「カシュブ文法」があるが、前者は 19 世紀の若手文法学派の手法で書かれており、また 19 世紀末から 20 世紀初頭に

収集された資料を分析したもので、言語分析理論としても古く、言語資料も現状を表すものではない。なお、後者は前者を要約したものに過ぎず、学問的な価値が高いとは言えない。格の統語論に関しては Cybulski(2002)「カシュブ語動詞の格支配」があるが、この研究のために記述・分析における理論的側面が欠如していた。

その他の研究では、基本的にインフォーマント調査は行わず、上記のポーランド人研究者が集めた資料に基づき、限られた例が繰り返し扱われていた。また、既に多く刊行されているさまざまなカシュブ語による印刷物も研究対象には用いられてこなかった。したがって、今日の言語状況を分析する上で、これらの新資料やインフォーマント調査を踏まえた資料に基づき、そして新たな分析理論を適用した、現代の言語学の水準にたえうるカシュブ語統語論の記述と分析が必要とされていた。

２．研究の目的

以上に鑑み、本研究では、従来の研究において特に注意が向けられてこなかった、次の三点に注目したカシュブ語統語論の分析を目的とした。

（１）新たな資料の収集：現地調査に基づき、カシュブ語の現状を示す新たな資料を収集し、それを従来の資料と比較する。

（２）新たな記述方法：従来は、形式面に重きが置かれ「形式→意味」という一方向的な記述に留まっていたが、これに加えて「意味→形式」という方向でも行い、意味的な類似点がどのように異なる形式で実現するかを検証する。

（３）言語接触の影響の分析：数世紀に渡るゲルマン諸方言との接触の結果、カシュブ語には他のスラブ諸語にはない統語的特徴が観察される。また近年は特にポーランド語との二言語併用による影響も大きい。このような借用による統語現象を「文法化の度合い」という視点から分析する。

（４）言語類型論的分析：（３）に関連して、カシュブ語における言語接触と言語変化のパターンを、特に類似した言語状況を経験した、あるいは現時点で経験しているスラヴ諸語の場合と比較しつつ、言語接触論及び言語類型論の一般論を踏まえて分析する。

３．研究の方法

２．で挙げた目的を、以下の方法論を用いながら研究を進めた。

（１）インフォーマント調査：申請者が言語類型論的な研究成果に基づいて作成した統語論分析の質問項目を用い、現地調査を行い例文を収集する。加えて、通時的な研究の意味において、それを Hilferding、Lorentz、Topolinska らが収集した、19 世紀から 20 世紀半ばごろの方言資料、またカシュブ語による印刷物に見られる用例とも比較分析する。

（２）機能的文法論の適用：本研究では、Bondarko や Xrakovskij らによるペテルブルク学派の機能的なアプローチによる分析手法を用いて、普遍的な意味カテゴリーからその実現形式という視点で統語構造の分析・記述を行う。

（３）言語接触の分析：統語構造のうち、特にドイツ語およびポーランド語と類似する現象のリストを作成し、インフォーマント調査を通じて、所与の構造の生産性を検証する。同時に、それらの構造変化や出現率などを 19 世紀半ばから 20 世紀半ばに収録された方言テクストから抜出、それを本研究で得られた新資料に照らし合わせ、現れた時代と文法化の度合いおよびそのパターンを分析する。

（４）言語類型論的分析：所与の現象が、言語類型論視点から見て、どの程度一般的に生じうる範疇なのかを検証し、言語接触から起きた変化なのか、それとも言語内で起こりうる変化なのかを検証する。

４．研究成果

本研究では、従来カシュブ語研究で分析されたことがなく、言語類型論からみても特に重要と思われる文法意味カテゴリーとして、「所有性」、「存在性」、「受動性」、「結果性」、「具格性と共格性」の文法化の度合いを共時的に分析、また文法化のプロセスを通時的に分析した。さらに、カシュブ語統語論から得られた知見をもとに、スロヴェニア語における受動文、セルビア語における結果性を表す構文、セルビア語における西欧諸語的要素、スラヴ諸語全体における具格性と共格性の合一についての研究成果を出した。これらの研究成果は、主に欧文による論文、欧米各国の大学における 5 回の招待講演を含めた研究報告として発表された。

また、2012 年度には、カシュブ本土だけではなく、カナダ・オンタリオ州のウィルノ市周辺に居住するカシュブ移民の言語調査を行うこともできた。ドイツ語およびポーランド語からの影響が 150 年間ほとんどなく、さらに英語からの影響が圧倒的であったというカシュブ本土とは異なる言語接触のパターンを経験したこの方言の統語分析は、カシュブ語研究において初めての成果であった。オンタリオ州での調査は比較的短期間であったため、この地域のさらなる調査が今後の課題ともなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 13 件）

1. Bernd Heine, Motoki Nomachi (2013) “Contact-induced replication: Some diagnostics.” *Shared Grammaticalization With special focus on the Transeurasian languages, Studies in Language Companion* 132. pp.67-100. （査読有）
2. Motoki Nomachi (2013) “U Kaszubow w Kanadzie 1-2.” *Pomerania* Nr.2-3. pp.42-44, pp. 36-37. （査読有）
3. 野町素己(2012)「セルビア語の言語構造に見る＜東＞と＜西＞－中東欧・バルカンにおける言語接触」『ユーラシア世界』1 巻 pp.207-231. （査読有）
4. Motoki Nomachi(2012) “On the so-called possessive resultative in standard Serbian.” *Leptir masna:The literary journal of Balkan Studies.* vol.9, pp.89-97. （査読有）
5. Motoki Nomachi (2012) “The Kashubian recipient passive and its grammaticalization.” *Gedenkschrift fur G. Shevelov.* pp.109-136. （査読有）
6. Motoki Nomachi(2012) “Toward the preservation and development of Banat Bulgarian culture: an outsider’s perspective.” *XXI vek Forum za proevropsku komunikaciju.* pp.14-18. （査読無）
7. 野町素己(2012)「東欧にかかる言語の虹―オンドラ・ウィソホルスキとその言葉―」『東欧地域研究のいま―トランステリトリアルな視点から』pp.204-224.（査読有）
8. Motoki Nomachi(2011) “From possession to passive: the Slovene recipient passive through the prism of grammaticalization theory.” *The grammar of possessivity in South Slavic languages: Synchronic and diachronic perspectives.* 24 pp.55-81. （査読無）
9. 野町素己(2011)「スロヴェニア語の構文「dobiti+受動過去分詞」について―文法化の観点からの分析と試論―」『西スラヴ学論集』14 号 pp.26-47. （査読有）
10. Motoki Nomachi, Bernd Heine(2011) “On predicting contact-induced grammatical change: evidence from Slavic languages.” *Journal of Historical Linguistics.* vol.1 pp.48-76. （査読有）
11. Motoki Nomachi(2010) “O izostavljenju pomocnog glagola biti u lehitskim jezicima.” *Juznoslovenski filolog LXV.* pp.331-344. （査読有）
12. 野町素己(2010)「カシュブ語の受容者受動構文とその文法化をめぐって」『スラヴ研究』57 号 pp.27-57. （査読有）

〔学会発表〕（計 14 件）

1. Motoki Nomachi “Polysemy copying or replica grammaticalization? The recipient passive in West Slavic languages with special attention to Kashubian.” Slavic linguistics seminar, 11/19 2012, University of Washington (USA)
2. Motoki Nomachi “The revitalization of the Banat Bulgarian language: its history, current status and the role of transborder language politics.” 44th ASEEES annual convention, 11/16 2012, Hotel Marriot New Orleans (USA).
3. Motoki Nomachi “Two periphrastic verbal constructions in Kashubian in the context of language contact.” Slavic and East European cultures seminar, 6/1 2012, The Ohio State University (USA)
4. Motoki Nomachi “Contact-induced grammatical change: a case of Kashubian passive voice.” Slavic language seminar, 5/22 2012, University of Chicago (USA)
5. Motoki Nomati “Iazykovoi kontakt i grammatikalizatsiia zalogovoi konstruktsii.” Grammaticalization and Lexicalization in Slavic Languages. 11/17 2012, Hokkaido University (Sapporo, Japan)
6. Motoki Nomachi “Moja droga kaszubska.” IX Bałtyckim Festiwalem Nauki 5/29 2011, Gdansk Univesity (Poland)
7. Bernd Heine and Motoki Nomachi “On contact induced grammaticalization: Internally or externally induced?” Shared grammaticalization in the Transeurasian languages. 9/22 2011, University of Leuven (Belgium)
8. Motoki Nomachi “How many perfects does Kashubian have?” The 6th meeting of the Slavic ligunsitics society. 9/4 2011, University of Aix en Provence (France)
9. Motoki Nomachi “Three perfect forms of Kashubian and their mutual relations.” BASEEES conference. 4/5

2011, University of Cambridge (UK)

10. Motoki Nomachi "The recipient passive in Kashubian: grammatical replication and innovation." VIII International Council for Central and East European Studies. July 23. 2010, Stockholm City Hall (Sweden)
11. Motoki Nomachi "Does Slovenian have 3 passive constructions? On the so-called recipient passive and its grammaticalization in Slovenian." 17th Balkan and South Slavic Conference. April 15 2010, The Ohio State University (USA)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
無し

６．研究組織
(1)研究代表者
野町　素己（MOTOKI NOMACHI）
北海道大学・スラブ研究センター・准教授
研究者番号：50513256